



もくじ

展示紹介

浮世絵と御開帳 相模と江戸の往来P 1
「江の島弁財天の江戸開帳」P 2
「浮世絵に見る江の島の楽しみ方」P 3
浮世絵資料に見る 人々の往来とにぎわいP 4、P 5
探訪ルポ 大雄山最乗寺 道了尊をたずねるP 6、P 7
ONIKAGE 学芸員のページ/浮世場なれ/編集後記P 8

浮世絵と御開帳 相模と江戸の往来

会期 2019年7月23日(火)～9月1日(日)



歌川広重 「相州江の嶋弁才天開帳詣 本宮岩屋の図」

江戸時代の人々の信仰心は、日々の暮らしの中で様々な姿をみせますが、中でも、参詣は、小さな旅行でもあり、特別な非日常として楽しみのひとつでした。藤沢宿は、江の島詣と大山詣りの重なる場所であり、当時の賑わいを写した浮世絵が多数描かれています。今回の企画では、江の島詣と大山詣りを中心に、相模の参詣地から江戸への出開帳などの往来についての浮世絵、資料を展示します。

本号では、藤澤浮世絵館の開館3年目の節目の年でもあることから、参詣の歴史文化についての造詣が深い鈴木良明氏と、浮世絵をはじめとした江戸文化に造詣の深い藤澤茜氏に、藤沢市の郷土文化の資料である浮世絵をまた違う角度から研究者の視点で解説していただきました。

江の島弁財天の江戸開帳 鈴木良明

江戸などの大都市へ出かけ尊像や霊宝などを開帳することが江戸時代しばしば行われた。これを「出開帳」といい全国の寺社は競って開催を望んだ。江戸での出開帳には寺社奉行所の差免を要したが、その目的が寺社の再建・修復などの費用を捻出することにあり、大都市の人々からの喜捨に期待したからであった。江の島弁財(才)天像は霊験あらたかな尊像で「江島詣」を重ねる江戸の人々には夙に知られていたからこの出開帳であった。

江の島弁財天の江戸出開帳は、延宝9年(1681)の浅草・第六天境内、文政2年(1819)の深川・八幡境内、安政3年(1856)の深川・八幡境内で都合3度開催された。出開帳の本尊はいずれも本宮(岩屋)安置の八臂弁財天のうちの一軀。江の島には本宮はじめ上之宮、下之宮にも弁財天像が祀られてあったが、江戸出開帳は常に本宮の弁財天像、すなわち本宮を管理する別当岩本院が当たった。

「江之島大弁財天開帳御着の図」は安政3年の出開帳で弁財天が深川八幡に到着した際の状況を伝えた刷物。輿に乗った弁財天は従者を従えた行列仕立、旗・幟・まねき等を掲げてこれを迎える諸講中と人々を描く。講中名には、深川・日本橋・神田・芝・京橋・霊岸島・四ツ谷・赤坂・・・などの町名が見えるほか、音曲の常磐津連、清元連、杵屋連の名、また盲人数千人とその門弟らが賑やかに出迎えた様子が伝わる。江の島の弁財天信仰が江戸で支持されていた一端をうかがえよう。

(すずき よしあき 鎌倉国宝館長)



作者不詳「江之島大弁財天開帳御着の図」



歌川国郷「江の島弁才天開帳参詣群集之図」

浮世絵に見る江の島の楽しみ方 藤澤 茜

安芸の宮島、琵琶湖の竹生島とともに三大弁財天に数えられる江島神社は、江戸時代に広く信仰され、巳年と亥年の六年に一度の御開帳を目当てに多くの人々が足を運びました。長距離の旅が難しかった女性にとって、江戸から近い江の島への参詣は、男性における「伊勢参り」に匹敵するものだったと考えられ(原淳一郎著『江戸の寺社めぐり 鎌倉・江ノ島・お伊勢さん』)、また弁財天が音曲の神であることから、【本号表紙図】のように女太夫たちの参詣姿を描いた浮世絵も多く見られます。嘉永4年(1851)2月の弁財天の開帳を当て込んだこの絵には、お揃いの格好をしたいくつかのグループが描かれ、木瓜の紋が常磐津節、三つ柏の紋が清元節、杵をかたどった紋が長唄を示しています。海に飛び込む子供たちが魚を捕る様を見せる「かづき芸」を披露していたり、右手にある平たい俎板岩では釣りをしている女性たちがいたり、参詣には「行楽」としての要素がプラスされていたことがよくわかります。



落合芳幾「江之島恵比寿屋楼上之図」

江の島の図には歌舞伎役者が訪れる様を描いたものもあり、著名人も訪れる人気スポットという宣伝効果が期待されました。明治期には錦絵新聞(明治7~14年(1874~81)に刊行、「東京日日新聞」など知識人向けの新聞記事を一枚絵に仕立てたもの)でも、役者の江の島参詣が伝えられています。錦絵新聞の文章は新聞記者が一般向けに書き直し、その内容に見合った絵を浮世絵師が描きました。左図には、「江之島恵比寿屋楼上之図」と記載があり、明治8年(亥年)の弁財天の開帳と臨時大祭にあわせ、旅館の恵比寿屋に三階の高楼ができたこと、そして恵比寿屋を訪れた歌舞伎役者が名前を染め抜いた暖簾を贈ろうと用意していると報じられています。高楼でくつろぐ人々のほか、大きく描かれるのは似顔絵で表現された歌舞伎役者です。手前より初代市川左團次、五代目尾上菊五郎、九代目市川團十郎で、後に「團菊左」と

称され明治期の歌舞伎界を牽引する役者たちです。中でも五代目菊五郎は、江の島が舞台の芝居『白浪五人男』で主人公の弁天小僧を勤めており、江の島のイメージを持つ役者といえます。「東京日日新聞」の記事自体が恵比寿屋の高楼の宣伝のようですが、江戸時代から続く恵比寿屋は老舗の旅館であり、少し時代は下りますが『漫遊案内東海道編』(明治28年)によると江の島の旅館、料理屋の筆頭に挙げられ、「その構え手広にして、屋には別荘を設け眺望も亦佳なり」と記されています。宿泊施設や料理も充実し、多くの人々を楽しませてきた江の島の魅力が、このような浮世絵から読み取ることができるのです。

(ふじさわ あかね 国際浮世絵学会常任理事)

浮世絵資料に見る 人々の往来とにぎわい

2 藤沢宿名物「江の島詣」と「大山詣り」のにぎわい



図1 歌川広重「東海道五拾三次之内 戸塚」

1 道中の「講」と宿



図2 左図の拡大図 茶屋の軒に並ぶ講中札

街道の宿場や立場で、旅人は人馬の交代や宿泊、休憩をしましたが、人々の通行が盛になると、旅の利便性を求めたネットワークである「講」が形成されました。図1は戸塚宿の茶屋の店先ですが、「こめや」と記された看板の左手の軒には、いくつもの木札が下げられています(図2)。これは「講中札」といって、講(同一の信仰や目的を持つ人々の組織)が霊場地へ参詣に赴く人の便宜のために、道中の茶屋や旅籠屋、御師の宿坊などに掲げられました。木札は右から、①大山講中[大山参詣の講中]、②月参講中[毎月一定の日に神社や寺に参詣する講]、③百味講[神仏に百味を供える江戸の講中。歌舞伎の弁天小僧のセリフにも登場し、江島神社辺津宮の灯笼は文化年間に江戸八丁堀の百味講によって奉納された]、④神田講中[上部に丸に「一山」とあり、一山講=富士信仰と思われる]、⑤京橋講中[京橋は江戸の地名。上部に富士山が図案化されているので、富士参詣の講中と思われる]、⑥太々講[伊勢参宮のために結成された信仰集団で、地域や職能集団など]です。

図3は明治12年(1879)の「大山報徳集成敬慎講社定宿」講帳(大山詣りの全国の定宿を記したもの)です。田村通り大山道では、四ツ谷(藤沢市城南)の山崎屋重助、藤沢(宿)の国府屋彦右衛門ほか6軒、柏尾通り大山道では、長後(藤沢市長後)の小間物屋佐治兵衛、鴨居屋藤兵衛が定宿として記載されています。

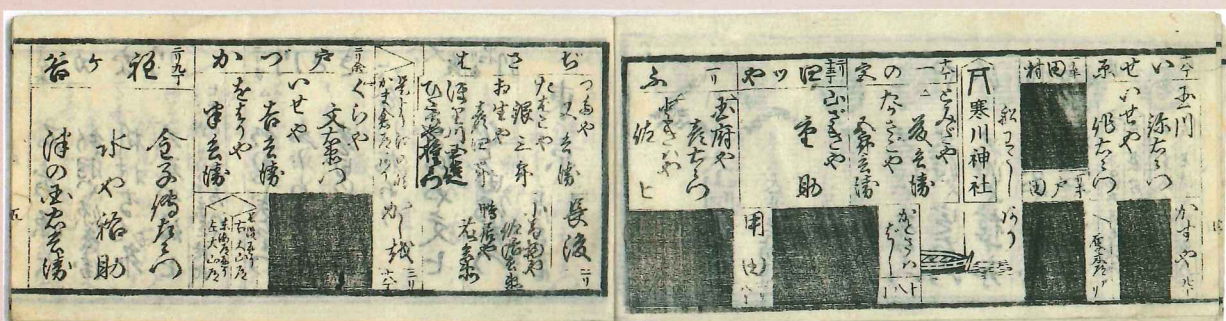


図3 「大山報徳集成敬慎講社定宿」

江戸時代、東海道藤沢宿は「江の島詣」と「大山詣り」の拠点としてにぎわう場所でした。浮世絵等の資料には、その姿がうかがえるものがいくつかあります。図1は魚屋北溪画「東海道中歌入双六」の藤沢のコマです。宿場の宿屋の風呂焚きの風景に狂歌が添えられています。歌は「江の嶋に 大山詣 春夏の ふた木はことに さかふ藤沢」。風呂の蓋木(ふたぎ)に春夏の二つの季節(ふたぎ)をかけて、藤沢宿が江の島詣の盛んな春と、大山詣りが解禁となる夏の季節が殊に繁盛する、と詠んでいます。

藤沢宿は、北東方向から下った東海道が宿場で曲がって西へ走り、東は鶴岡八幡宮方面への鎌倉道、南は江の島道、北東へは用田(藤沢市用田)を經由した厚木道、北方向への八王子道(滝山街道とも)といった交通の要衝でした。さらに東海道を西へ進んで四ツ谷(藤沢市城南)から大山阿夫利神社(伊勢原市)への大山道(田村通り大山道)が分かれていました。なかでも人気の江の島詣と大山詣りは江戸からの参詣客が多く、今回紹介した狂歌に詠われていたように宿場は宿泊客でにぎわいました。

図2は歌川広重「東海道五十三次細見図会 藤沢 平塚江三里半」。正面には道中風俗「草原野休の図」が描かれていますが、背景の風景画は藤沢宿の「名所案内図」になっています。範囲は、東(左手)は「かまくら」「七面山(龍口寺)」「片瀬」「遊行寺(小栗の旧跡)」「江の島」から、西(右手)は「南湖立場」「四ツ谷追分」「大山道」までが描かれています。



図1 魚屋北溪「東海道中歌入双六」コマ絵



藤沢を取りまく街道

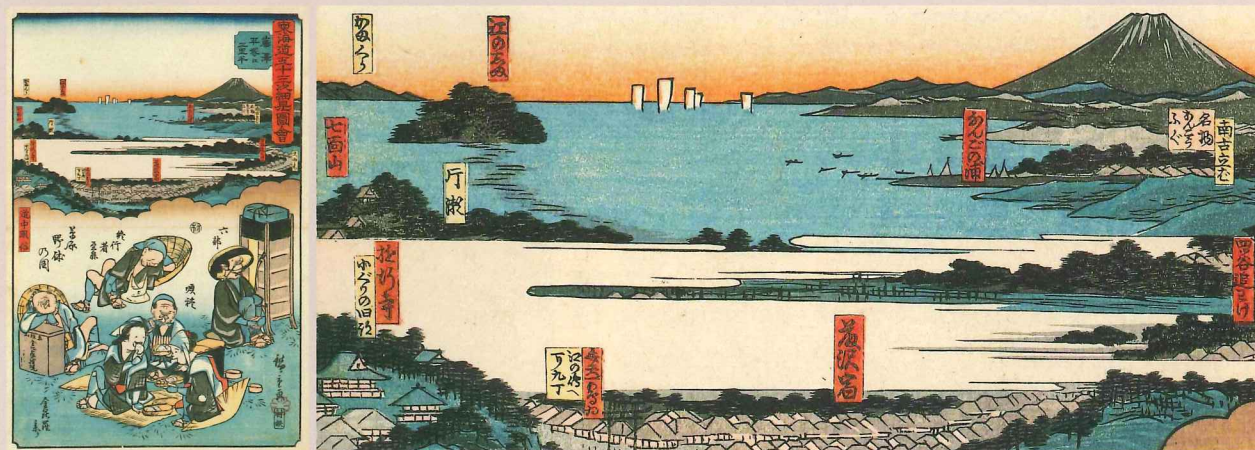


図2 歌川広重「東海道五十三次細見図会 藤沢」
〈左図の上部の抜粋拡大図〉 細かに名所旧跡が記載されている

大雄山最乗寺 道了尊をたずねる



江戸時代の人々がこぞって出かけた神社仏閣をめぐる参詣の旅は、昨今の「パワースポット」ブームや「御朱印あつめ」ブームと相まって、現代では参詣は「行楽行事」として親しまれています。神奈川県内で有名な参詣スポットといえば、江の島はもちろん、鎌倉や大山などが挙げられますが、今回は南足柄市にある大雄山最乗寺（道了尊）を参詣の道のりに沿って紹介します。

大雄山最乗寺とは

室町時代の応永元年（1394）に、了庵慧明禅師によって開山された曹洞宗の寺院です。曹洞宗の寺院の中で、福井県の永平寺、鶴見の総持寺に次ぐ格式。了庵禅師の弟子で、開創に貢献した僧・道了にちなんで、道了尊（または道了さん）とも呼ばれています。

ふりだし

小田原から大雄山線に乗ります。小田原駅の改札の上には、道了の化身・天狗がお迎えしてくれます。



大雄山線終点の大雄山駅。こちらは金太郎の像がお出迎え。

大雄山駅から最乗寺までバスで約10分ですが、今回は徒歩で向かいます。駅から約1キロ歩くと、仁王門があらわれます。ここから最乗寺の三門まで約2キロ、杉並木の参道を進みます。



阿吽の仁王像が配された仁王門



神奈川県古道50選「天狗のこみち」

参道には一丁目から二十八丁目まで火袋付きの道標が配置されています。



袈裟掛けの松

おわし大鷲に持ち去られた了庵禅師の袈裟が掛けられていたという伝承を持つ松。



バスの終点

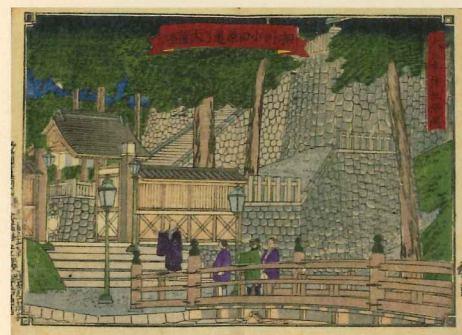
土産店が並ぶ三門前の広場

ひと休み



「大雄山」の扁額を掲げる禅宗様建築の三門

結界門とその奥の御真殿に続く石段が描かれています。



三代歌川広重「大日本神社仏閣 相州小田原道了薩埵」



杉林と石段が続く境内



御供橋と結界門



「護国殿」と称する本堂



ひな壇上に整備された境内を奥に進む。



道了大薩埵が祀られる御真殿に続く77段の石段



小天狗(左)と大天狗(右)



いよいよ奥の院へ向かいます。奥の院におかってそびえる354段の石段



道了大薩埵の像



夫婦和合の象徴とされる高下駄

道了大薩埵の本地仏・十一面観音を祀る。



「慈雲閣」と称する奥の院



御朱印もいただきました

あがり!



三代歌川広重「相州小田原道了宮明治四未ノ二月廿日ヨリ両国回向院ニテ開帳参詣乃圖」この浮世絵は、明治4年の東京回向院の出開帳の様子を描いています。たいへんな賑わいで、当時から人気がありました。

本尊は釈迦如来、脇侍に文殊・普賢両菩薩を祀る。



ONIKAGE 学芸員のページ 絵巻について

き～んと眩しい夏空、涼しい浮世絵館にいらっしやいませんか？ 3月の「江嶋縁起絵巻」に続いて、今回は「大山寺縁起絵巻」が出版されておりますよ。今回は、この、絵巻について少しお話をいたしましょう。

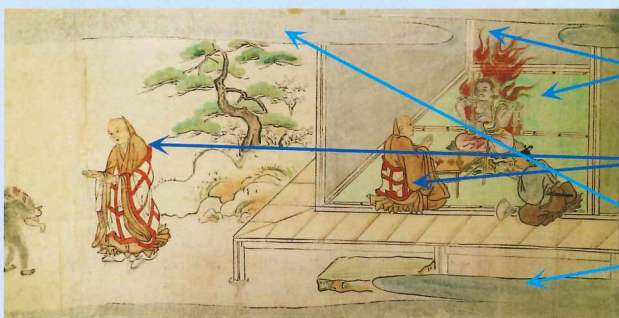
ふたつの絵巻には、文字の部分「詞書（ことばがき）」にお話しが書かれ、絵の部分には話の印象的なシーンが描かれております。これを「段落形式」と言います。そして、ちょっとしか詞書がなかったり絵だけだったりして、絵で物語が展開するものを「連続形式」と言います。

さて、大山寺縁起絵巻のストーリーは…と申しますと、相模の国司太郎太夫時忠夫妻が如意輪観音に子どもを授かりたいと祈念する場面から始まり、やっと生まれた子どもを驚にさらわれ、さらわれた赤ちゃんが奈良の僧侶「覚明上人」に育てられ、後に僧侶「良弁」となって東大寺を建立し別当となり、父母と再会を果たし、親子で相模の国に戻って、大山寺を建立して、その大山寺が繁栄すると言う、大スペクタクルドラマなんでございますよ。

今回はその絵巻を味わうために、いくつかのテクニックを押さえておきましょう。

〈其の壹〉 絵巻は右から左へ進み、時間も右は過去、開いているところが現在、左手が未来です。

〈其の貳〉 ひとつの場面に同一人物が複数描かれている場合、時間の経過を表します。異時同図<<いじどうず>>と言います。この部分には同じ「覚明上人」が描かれておりますね。右は不動明王に祈念している場面、左は翌日の場面です。



天井や壁がない吹抜屋台

覚明上人

霞



引目鉤鼻

〈其の参〉 絵巻の視点は、少し高いところから俯瞰する構図が多く、また、いくつかの方向から見た所をひとつの視点に合成しています。室内を俯瞰する構図の場合は、中を覗く時に邪魔な屋根や天井や格子を取り払って描かれております。これを吹抜屋台<<ふきぬぎやたい>>と申します。

〈其の四〉 この絵巻では生き生きとした表情で描かれておりますが、古い絵巻には、貴族や皇族などの人物やその侍女たちなどは、下ぶくれの顔に、ぼやかされた眉、線で引かれた眼、くの字形の鼻、小さな口というような引目鉤鼻<<ひきめかぎはな>>という技法で描かれているものがございます。身分の低い者たちには、この技法は使用されておられません。

〈其の伍〉 いくつかのシーンを描き連ねて展開する絵巻にとって、霞は、場面が変わる時に次の光景へ導く重要アイテムでございます。また、絵巻には見える光景がすべて描かれているわけではなく、不要な部分は霞をただよわせて必要な部分を浮かび上がらせます。それから、遠近感を出すためにも霞が使用されます。なんとも便利な霞じゃあございませんか！

装束、建築、食物、武具、調度品等を知るための絵画資料としても興味が尽きない絵巻。是非是非、お楽しみください。



編集後記

江戸時代の人々にとって、御開帳は数年に一度の行事でしたので、心待ちにしていたのでしょ。江戸への出開帳も大きなイベントであり、人々を楽しませました。浮世絵に遺された往時の人々が楽しんだ気持ちを感じていただければ幸いです。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041 神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階

【電話】0466-33-0111 【FAX】0466-30-1817

【開館時間】10:00～19:00（入館は18:30まで）

【休館日】月曜日（祝日、振替休日の場合は翌平日）

※その他、展示替えのために休館日がございます

【HP】[藤沢市藤澤浮世絵館](#)で検索Q

facebook：藤沢浮世絵館 公式アカウント

このマークが目印です。「いいね!」をお願いします。

